

## [4]

氏名(本籍)	謝 黎		
学 位	博士(学術)		
学位記番号	博甲第27号		
学位授与年月日	平成16年3月		
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当		
論文題目	服飾からみた近・現代上海における「伝統」の操作 — <sup>チーパオ</sup> 旗袍をまとう女性たち—		
論文審査委員	(主査)	元教授	本多 俊和 (スチュアート ヘンリ)
		教授	伊藤 セツ
		教授	平井 聖
		東京都立大学 教授	渡邊 欣雄

## 論文要旨

この学位請求論文は、中国の<sup>チーパオ</sup>旗袍(チャイナドレス)という服飾形態を研究対象とし、歴史人類学的方法を用いた衣服の変化を通時的に考察した。本論では、服飾の形やデザインを服飾史的に検討するだけでなく、歴史人類学的な視点から、<sup>チーパオ</sup>旗袍を「近代」の産物と位置づけた。

<sup>チーパオ</sup>旗袍を着用するにあたっての価値観や「伝統」の容認と拒絶、「西洋」に対する憧憬や「民族」的なアイデンティティなどを読み解きながら、「近代」中国における「伝統」の意味を、<sup>チーパオ</sup>旗袍を題材に論を進めた。その上で、社会構造を分析し、<sup>チーパオ</sup>旗袍を着用する女性の社会的な地位を検討することによって、「民族服」、「伝統服」、「流行服」として変化する<sup>チーパオ</sup>旗袍の社会的な意味を解明した。服飾をめぐる社会的変動を明らかにし、「近代」中国の変遷過程と<sup>チーパオ</sup>旗袍との関連を解明して、近・現代中国における「伝統」の継承と変容を吟味した。

考察対象時代を清朝末・中華民国期から、現代までとした。中国語活字資料を使って継続的に社会の変動をとらえるため、長期にわたって刊行された媒体を重点的に選択して、主に3種類の発行物を採用した。

『申報』(1872~1949年)は、「中国近現代の百科全書」とも評価され、清朝末期から中華人民共和国の成立まで、継続的に発行された出版物である。

中華民国期の画報である『良友』(1926~1946年)からは、都市文化最盛期の上海を中心とする風俗のあり方を継続的にとらえられる。

中華人民共和国建国の資料として、『中国青年』(1948年~現在)という雑誌を主たる情報源として、中国国内における、服装をめぐる政府(共産党)公的な見解を調査する資料として使っている。

論文は以下のような構成になっている。

序章では、旗袍<sup>チーパオ</sup>を研究対象とする問題提起と研究方法、先行研究、そして本論の学術的な位置づけをまとめた。序章で本論が分析対象とする資料を紹介するとともに、「近代」や「伝統」、「民族」や「中国人」など、本論で重要視される用語の説明を行なった。

第一章では、「近代」商業都市である上海で活躍した妓女や女学生を論じながら、流行服としての新型旗袍<sup>チーパオ</sup>が生まれる以前の旗人に由来する旗袍がどのように変化してきたを明らかにした。なお、ここでいう「妓女」とは、上海で活躍した、いくつかの階層に分かれる娼婦のことであるが、高級妓女は、社会的な尊敬を受け、メディアを通してそのファッションが注目されていた。

第二章では、「近代」上海の都市文化の中で、それまでの旗袍<sup>チーパオ</sup>の「民族服」としての性格が変容し、「奇装異服」の一形態としての新型旗袍<sup>チーパオ</sup>を誕生する過程を明らかにした。新型旗袍に含まれる多様な社会的意味を検討し、新型旗袍をめぐる流行現象の拡大に関しては、女学生や妓女、「近代」主婦や職業女性などの新都市女性に注目し、ファッションの形成をめぐる理論モデルを援用して、その構造を分析した。民国期中・後期には、新型旗袍は都市文化の摩登<sup>モダン</sup>ファッションとして受け入れられ、女学生や職業女性をはじめとする新都市女性が多様な新型旗袍を身につけるようになったことを論じた。新型旗袍という服飾形態がメディアを通して、広く中国全土に普及していったのである。

第三章では、中華人民共和国建国から文化大革命にかけて、旗袍<sup>チーパオ</sup>の排除と、改革開放以後において旗袍<sup>チーパオ</sup>が「伝統服」として再評価される過程を明らかにした。改革開放以降の新中国では国際交流が活発化し、対外的な貿易が拡大するにつれて、中国の「伝統」を明示して再構築が課題となっていることをとり上げた。他方で国内的には、「伝統服」が「中国人」としてのアイデンティティを表象する装置にもなっている様子を記述した。現代中国では対内的かつ対外的な動きの中で、かつて否定された旗袍<sup>チーパオ</sup>が「伝統服」と位置づけられ、「伝統の創造」が行なわれている現象を指摘した。

終章のまとめでは、「旗袍の伝統性を構築する社会的意味」を2つの視座から考察している（図1）。

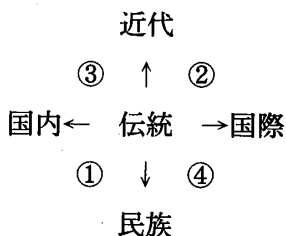


図1：旗袍<sup>チーパオ</sup>の伝統性を構築する社会的構図

一つの視座は、「伝統」の概念を性格づける「近代 - 民族」という軸である。それは旗袍に意味を与える論理の基盤を示している。旗袍が受容と否定の過程を繰り返しながら、時には「近代」と、時には「民族」とのつながりにおいて意味づけられてきた過程を整理する軸である。

もう一つは、「伝統」の概念が適用される場としての「国内 - 国際」という軸である。それは旗袍に意味づけられる国内の社会的空間を示している。中国の「近代化」過程は、西洋化や国際化と密接にかかわっており、そのなかで、旗袍にさまざまな意味が与えてきたことを、この軸において整理した。この2つの軸に沿って、清朝末・民国初期、民国中・後期、中華人民共和国建国から文化大革命期、改革開放期という4つの時期での旗袍<sup>チーパオ</sup>に与えられた社会的意味を解明した上で、旗袍の「伝統服」としての構造に分析を加えた。

これらの分析を通して、従来、行なわれてきた西洋的な視点での「伝統」論に対して、中国的な歴史観に基づく「伝統」を仮定して考察した。本論では、<sup>チンパオ</sup>旗袍をめぐる服飾学的かつ歴史人類学的な考察を加えることで、ホブズボウムとレンジャーが提唱した「伝統の創造」論に対する一つの反例（アンチテーゼ）を報告するとともに、「近代」中国の「伝統服」をめぐる新しい理論が提示されている。

## 審査報告要旨

謝黎の学位請求論文「服飾からみた近・現代上海における「伝統」の操作—<sup>チンパオ</sup>旗袍をまとう女性たち—」は、豊富なデータを緻密な理論的枠組みに当てはめた力作として、審査委員会において高い評価を得た。

本論文では、平成12年に提出された修士論文の「近代中国における旗袍の変遷—上海を中心として—」を発展させ、清朝末から現在まで旗袍の変遷を追跡している。理論的な枠組みとして、歴史資料（史料）を文化人類学的に分析する歴史人類学の手法を用いている。

チャイナドレスとも呼ばれる旗袍は、清朝末から経てきた歴史的経過を4つの時期に整理し、時期別の社会構造、女性の社会的位置づけ、そして旗袍という服飾そのものの変遷を3つの視点から文献資料を分析し、それぞれの時期を設定する根拠を明示している。

具体的に、4つの時期は、

- ①清朝の支配層である「<sup>きじん</sup>旗人」や、「満族」の服としての旗袍を否定される清末・民国初期
- ②西洋化した新型旗袍を受容される民国中・後期
- ③新中国建設による旗袍の伝統性が否定される新中国建国期から文化大革命期
- ④国際国家を形成する際に旗袍を活用して、民族の伝統服を創造する改革開放期

この4つの時期を設定するにあたって、資（史）料として、1872～1949年の間に発行されていた『申報』全400冊（824ページ）を丹念に調査したほかに、1926～1945年の間に発行されたニュース画報である『良友』と、中華人民共和国以降、現在まで発行されている『中国青年』が使われている。

『中国青年』は中華人民共和国の成立以降の資料に使った理由は、政府は1950年にあった88種の雑誌・新聞を分類・調整し、合併や廃刊をする政策をとった。そのため、女性やファッションを中心とする雑誌は極端に減少し、発行が継続的なものは少なく、短期間の発行が中心となっていたので、それらの雑誌・新聞は、「継続的に一次資料を調査する」という本論の方針と異なるため、1950年以降の資料として、北京で継続的に発行された雑誌『中国青年』に絞った。

歴史人類学的な理論にそって、以上の資料を分析した結果、中国の「近代化」過程における旗袍の受容と否定の歴史を、国内の社会構造の変化と、外的な要因である「近代化」の複合的な作用の産物であると結論づけられている。

旗袍の「伝統性」が「近代」と「民族」の狭間で揺れ動き、その揺れをもたらした社会的空間では、中国国内による「内の目」と、「外の目」を意識した国際社会における中国を表象するベクトルが示されている。旗袍という服飾形態の「伝統」は単に中国「伝統」の服飾の問題でもなければ、中国で捏造された「近代」的な「伝統服」でもないことを提示し、中国の「近代化」過程において複数の要因が複雑に絡み合った結果として、旗袍の「伝統性」の意味づけがなされている。

本論の学術貢献の一つは、文化人類学では無批判的に受容される傾向にあるホブズボウムとレンジャー

によって提唱されている「伝統の創造」論に対する批判である。「伝統の創造」論とは、「伝統」と呼ばれているものは、太古以来、連綿とつづいてきたものというよりも、近代の発明であるという理論である。しかし、この理論はヨーロッパ近代という時代が成立するために、創りだされる必要があったのである。

それに対して、謝は、ホブズボウムらに代表される西洋の事例を中心とする「伝統」の見方に対して、中国的な「伝統」を考察する場合には、必ずしも西洋モデルが全面的かつ的確に対応するものではないことを指摘している。すなわち、現代中国における「伝統」概念そのものが、ホブズボウムらが基礎とする西洋的な「伝統」概念と異なる意味合いを持つという問題である。そもそもなぜ、旗袍は時代とともにデザインや装飾が大きく変化するのに「旗袍」と呼ばれ続けるのか。そこには清朝期の旗人の服であった旗袍の、服飾としての「正統性」が引き継がれているという事実を捉え、西洋の歴史に偏っているホブズボウムらの「伝統の創造」論に対する建設的な批判を展開している。

以上のように、課程博士の学位請求論文として高く評価されたのであるが、この論文の完成度をさらに高めるために、上記の『申報』、『良友』、『中国青年』以外の資料を利用した場合、民国期以降の旗袍の成立と普及に関して、異なった傾向が浮上するのではないかという点が指摘された。また、調査・分析の対象として上海を中心に考察を行なっているが、他の地域では旗袍はどのように受容されたか、あるいは拒否されたかに関する考察が望ましい。さらに、旗袍が中国の「民族衣裳」として成立過程に関して、中国国内の資料を用いているが、旗袍を「チャイナドレス」、すなわち中国の「民族服」として定着していく過程に対して、「近代化」の源泉である「西洋」の目がどのように作用し影響を及ぼしたかに関する考察の充実が期待されるところである。

以上の点を勘案して、この学位請求論文は緻密な理論と綿密な資料分析を織り込んだ力作であると審査員一同が認め、学位授与に値する論文と判断した。